

テンパス



TEMPUS

2004年(平成16年) **19**号



も

く

じ

「俳人 原 コウ子」

特別展「桐の花 原 コウ子 - 貝塚生まれの美しき俳人 - 」開催中
企画展2「願泉寺に残る本願寺門主の絵画」

特別展「地蔵堂丸山古墳と大阪の前期古墳」(仮称)開催のお知らせ
新井・鳥羽北遺跡の発掘調査

古文書講座

「江戸時代のおひっこしー町人と百姓の暮らしー」

次回古文書講座(第18回)のお知らせ

市内の古文書調査から

山中家文書

俳人 原 コウ子

原 コウ子（本名 原 コウ、旧姓 志賀）は明治29年（1896）に泉南郡貝塚町大字貝塚北町（現在の大阪府貝塚市北町）で生まれました。

幼いころから父の影響で短歌などにふれることが多かったコウ子は大阪府郡立泉南高等女学校（現在の大阪府立和泉高等学校）に入学後、校友会誌「岸乃姫松」に俳句や短文を発表しはじめます。女学校の先生や卒業生、同級生などとともに句会をつくり、積極的に句作を行っています。

大正5年（1916）3月、女学校補習科教育科を卒業し、母校の貝塚尋常高等小学校（現在の貝塚市立北小学校）に代用教員として奉職すると、当時、高濱虚子（たかはまきよし）が主宰していた俳句雑誌「ホトトギス」を購読し、「俳句入門欄」に俳句を投稿しはじめます。この「俳句入門欄」で指導を行っていたのが後にコウ子の夫となる原

石鼎（せきてい）です。この出会いをきっかけに大正7年（1918）に二人は結婚します。

結婚後、コウ子は一時期俳句作りを絶ち、ホトトギスを退めて独立した石鼎を支えます。大正10年（1921）に当時、小野燕子（おのぶし）がみていた「草汁（くさじる）」を「鹿火屋（かびや）」と改名して俳句結社を石鼎が主宰することになると、



原コウ子と夫、原石鼎（昭和初年）



校友会誌「岸乃姫松」
コウ子は表紙デザインを担当しています。

コウ子は事務一切を担当しました。

しばらくすると石鼎は病気がちとなり、コウ子は石鼎に代わり「鹿火屋」を切り盛りすることになります。石鼎の俳句精神を引き継ぎ、多くの弟子達の面倒をみたり、後身の指導を行っています。

後にコウ子の世話になった人たちは、「コウ子夫人は何かあると、まめに手紙を書いて気遣いをみせてくれた」と記しています。

また、婦人だけの俳句欄「花英集（かえいしゅう）」や婦人の俳句会「立葉会（りつようかい）」を設立するなど、女性の台頭に尽力しました。

このようなコウ子の努力により台頭して

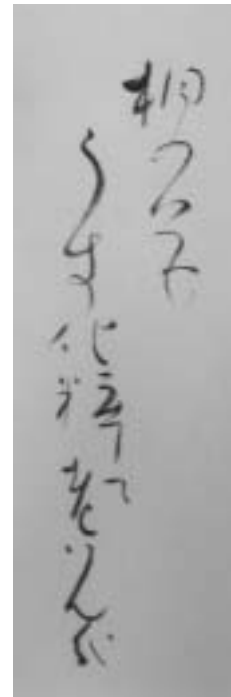
きたのが、後にコウ子の養子となりコウ子に続いて「鹿火屋」を継ぐ堀込 昇、後の原 裕（はらゆたか）です。

石鼎の死後は「鹿火屋」を継ぎ、以前にも増して後身の育成に力を注ぎます。女性俳人の育成にも力を入れ、浅見和子（現在の鹿火屋主宰 原 和子）らが台頭しました。

コウ子は、単なる風景の描写にとどまらず、優れた写生力を生かして、人間の顔や動作を観察した句や様々な場所で働いている人々を観察した句、時代の世相を詠んだ句を多く作りました。

このような俳句は当時の俳句にはあまりみられません。同時代には長谷川かな女、杉田久女（すぎたひさじょ）、少し遅れて中村汀女（なかむらていじょ）、橋本多佳子（はしもとたかこ）、星野立子（ほしのたつこ）、三橋鷹女（みつはしたかじょ）が活躍していますが、彼女達の俳句と比べて、コウ子の芯の強さを表すような骨太の俳句を作っています。

代表的な俳句は以下のとおりです。



原コウ子直筆作品俳句帖
（桐の花薄化粧して老いん哉）

桐の花薄化粧して老いん哉 (昭和二十八年、展示品)

細帯をしめて遅日の古町へ (昭和二十九年、展示品)

耐えて来し身にちる紅葉あかあかと (昭和二十六年、展示品)

つまと居て夫恋しさや若葉窓 (大正十三年)

征く人の頭を美しくしと冬の街に (昭和十六年)

たましひの艶はげて菊のさかり病む (昭和二十四年)

蛍火の飛ぶ一つだに相寄らず (昭和二十九年)

山茶花は魂のはな散りてなほ (昭和五十一年)

コウ子は今まで夫、原 石鼎を影で支え、つくした従順な女性というイメージでとらえられがちでしたが、今回の展示では俳人として、また、女性の台頭に力を注いだ非常に自立心のある女性としての一面も紹介しています。郷土貝塚にこんなすばらしい女性がいたのだということを皆さんにも知っていただきたいと思います。ぜひ足をお運びください。

特別展「桐の花 原 コウ子 貝塚生まれの美しき俳人」開催中！

平成16年9月4日(土)から開催しています。

原 コウ子(1896~1988、旧姓 志賀 コウ)は、俳人 原 石鼎(せきてい)の妻で、石鼎亡き後、俳句結社「鹿火屋」(かびや)を主宰した泉南郡貝塚町大字貝塚北町(現在の貝塚市北町)出身の俳人です。本展では、コウ子が学んだ大阪府郡立泉南高等女学校時代(現在の大阪府立和泉高等学校)の作品が掲載された校友会誌「岸乃姫松」や貝塚尋常高等小学校(現在の貝塚市立北小学校)奉職時代に投稿した作品が掲載された「ホトトギス」をはじめ、コウ子直筆の短冊・色紙・掛軸や著作物、晩年に愛用した品々など62点の資料を展示しています。展示会は11月7日(日)まで開催しています。



また、期間中10月24日(日)午後2時から、貝塚市民図書館2階視聴覚室において、「かいづか歴史文化セミナー」で記念講演会および記念俳句会を開催いたします。詳細は下記のとおりです。皆さまのご参加をお待ちしています。

< 第67回かいづか歴史文化セミナー >

記念講演会

日 時：平成16年10月24日(日) 午後2時~5時

場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

内 容：「俳人 原 コウ子」(仮題)

講 師：原 和子氏(「鹿火屋」主宰)



大阪府立和泉高等学校所蔵「岸乃姫松」第十三巻天長号より

原 コウ子(当時 志賀 コウ)が、泉南高等女学校時代(当時18歳)に詠んだ俳句です。

記念俳句会

記念講演会終了後に開催いたします。兼題等詳細は当日講演会前に発表いたします。

上記特別展の展示図録を刊行しました。本書では、俳人 原 コウ子の生涯についての解説、展示品の図版、関係年表などを掲載しています。

お求めは社会教育課または郷土資料展示室まで

一部 300円



企画展 2 「願泉寺に残る本願寺門主の絵画 - 平成15年度貝塚市指定文化財の紹介 - 」

本展は、平成16年6月5日(土)から7月25日(日)にかけて開催しました。

本展では、平成15年度貝塚市新指定文化財である願泉寺所蔵の本願寺歴代門主画像23組26幅を展示紹介しました。市民の皆さんをはじめ、本願寺の関係者や市外の門徒の方々など多くの皆さんに観覧いただき、40日間で800名以上の来館者を数えました。

展示期間中には、岡村喜史(文化財審議委員・龍谷大学講師)氏による記念講演と社会教育課学芸員の案内による現地見学会を開催しました。また、7月23日(金)には、寺内町まちづくり連絡協議会総会の記念講演として、草野顕之(大谷大学教授)氏に「東本願寺と願泉寺」と題してご講演いただきました。草野氏の講演では、東本願寺と願泉寺の関係を大谷大学所蔵の初公開史料などにもとづいてお話しいただきました。願泉寺初代ト半斎了珍(ぼくはんさいりょうちん)の妻 新川祐西(にいがわゆうさい)の姪にあたる教寿院如祐(きょうじゅいんにょゆう)が東本願寺第十二代教如(きょうにょ)に嫁いているという深い関係にあるにもかかわらず願泉寺との関係を示す東本願寺側の史料が少ないことなど、江戸時代の願泉寺やト半家の性格を考える上で興味深い点をご指摘いただきました。



特別展 「地蔵堂丸山古墳と大阪の前期古墳」(仮称) 開催のお知らせ

平成17年1月15日(土)から3月19日(土)にかけて開催します。

平成14年度に行った史跡地蔵堂丸山古墳の調査により、円筒埴輪列と墓石を確認しています(テンプス14号参照)。

この調査は、昭和27年に大阪府教育委員会が緊急発掘調査を行ってから初めての本格的な発掘調査でした。本展では、大阪府下の古墳時代前期に築造された古墳を概観し、丸山古墳の発掘調査と比較検討しながら、大阪府下における丸山古墳の位置づけについて展示紹介します。

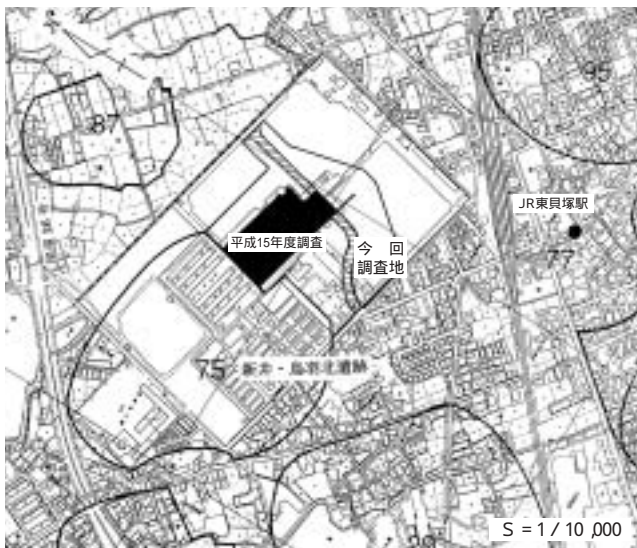


発見された地蔵堂丸山古墳の埴輪

新井・鳥羽北(にい・とばきた)遺跡の発掘調査

本市では、平成16年6月～8月まで、ユニチカ貝塚工場跡地の開発に伴う新井・鳥羽北遺跡の発掘調査を行いました。平成15年度の調査では掘立柱建物3棟、区画溝等を発見し、中世の集落の存在が明らかとなっています(テンブス15号参照)。

今回、自然流路、耕作に伴う溝、鋤溝、集落に伴う区画溝、掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を発見しました。自然流路は推定幅約20m、深さ2m以上で東西方向に流れていました。上層の部分から弥生時代中期(約2,000年前)の弥生土器が出土しました。これまでの調査では、弥生時代の石器は出土していましたが、土器ははじめての発見です。このことで、周辺に弥生時代の集落が存在した可能性があることがわかりました。

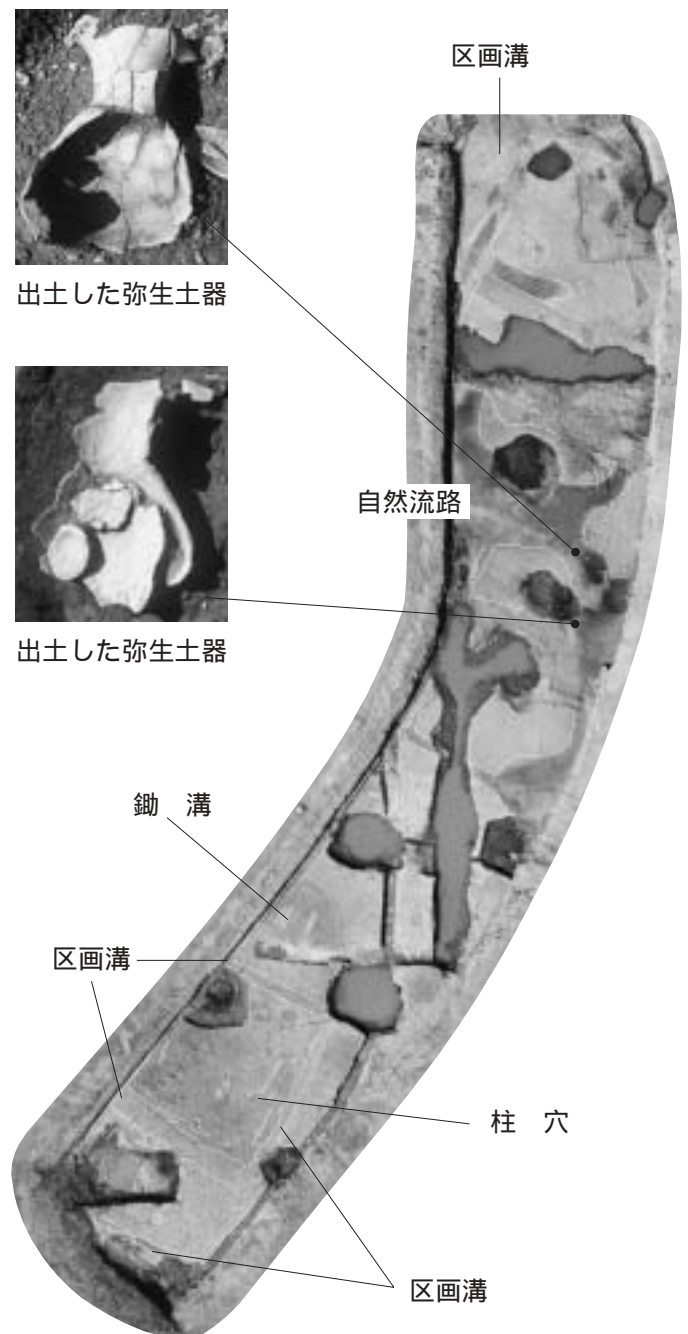


耕作に伴う溝、鋤溝は中世(鎌倉時代、室町時代)と考えられ、集落の周辺で農地が広がっていたことが想像できます。

集落に伴う区画溝は、幅0.7m～1.2m、深さ0.3m～0.5mで土師器、瓦器、瓦などの中世の遺物が出土しています。平成15年度の調査で発見した区画溝、掘立柱建物の方向と同じ南東-北西方向、直交する北東-南西方向の2方向を発見しています。

柱穴は、10基以上を発見しましたが工場造成時に地面が削り取られており建物を復元できませんでした。柱穴は円形で直径0.2～0.4m、深さは0.1～0.2mで瓦器、土師器などの遺物が出土しているものもあります。

これらの成果によって、中世の集落域が平成15年度の調査箇所よりさらに南側に広がることがわかりました。



古文書講座

「江戸時代のおひっこし 町人と百姓の暮らし」

平成16年4月17日(土)から4回にわたり、「江戸時代のおひっこし 町人と百姓の暮らし」と題して古文書講座を開催しました。

江戸時代に「おひっこし」?と思われた方も少なくないのでは?それは、江戸時代の人びとは土地にしばりつけられているというイメージが一般に流布していることによるでしょう。しかし、江戸時代の人びとの移動は決して珍しいことではなく、町や村を問わず行なわれていました。



町についてみていくと、さまざまな仕事がある町には、多くの方が働ける場所があります。商家に丁稚(でっち)として奉公する人や、日々の稼ぎ仕事、行商人など、例をあげるときりがありません。こうした町で働く人たちは他の町や村から入り、また出て行くといった形をとり、かなり流動的でした。

村の場合はというと、町ほど頻繁ではないものの動きはありました。江戸時代を通じてそれほど人口が変わらない村では、田畑に限りがあり、養える人口がほぼ一定していました。このように村では新たな産業が生まれ出されたり、新たな耕作地が開墾されたりしない限り人口は増えません。そのため村の人口が増えすぎると、他の町や村に働きに出たり、あるいは引っ越ししたりします。また、耕す人のいなくなった田畑ができると、他の町や村の人に耕してもらったり、田畑の近くに引っ越ししてきてもらったりしていました。

今回の講座では、貝塚寺内やその周辺の村々での事例として、転出先から転入先への手続きの書類や、引っ越しをする人の身元を保証する寺請(てらうけ)証文(江戸時代は自分が檀家となっているお寺が発行する証明書)などの古文書を取り上げました。これらの解説を通して、当時の様子に触れていただきました。

次回古文書講座(第18回)のお知らせ

「江戸時代のお葬式」

江戸時代の百姓や町人の葬儀に関するしきたりや手続きなど、当時の葬儀記録を通して、現代社会との相違点を見ていきます。

- 日 時：平成17年1月15日 - 初心者講習、1月22日 - 第1回、1月29日 - 第2回、
2月5日 - 第3回、2月12日 - 第4回、いずれも土曜日午後2時～4時30分
- 場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室
- 申 込：必要事項(住所、氏名、電話番号)を明記の上、はがき、Email、FAX、
電話いずれかの方法で、下記まで事前にお願ひします。

申込み連絡先

〒597-8585 大阪府貝塚市畠中1-17-1 貝塚市教育委員会 社会教育課
TEL 0724(33)7126 / FAX 0724(33)7107
Email shakaikyoiku@city.kaizuka.osaka.jp

市内の古文書調査から

教育委員会では、貝塚市に関わる古文書を調査し、歴史をひも解く作業を行っています。ここでは、昨年から今年にかけて調査を行った山中家文書を紹介します。

山中家文書

貝塚市消防本部に程近い貝塚市鳥羽に、山中家という旧家があります。この家に保管されてきた江戸時代から昭和10年代にかけての古文書類209点を新たに調査しました。

山中家は、江戸時代には、鳥羽村の年寄(としより)を勤めた家柄で、屋号は代々「源右衛門」と称していました。明治10年代には、鳥羽村村会議員をつとめ、議長にも就任しています。

今回の調査で確認されたものは、江戸時代の年貢通(ねんぐかよい)や、明治期の地券などが多くを占めています。

その中で注目されるものとして、明治から大正にかけて土屋弘(鳳洲=ほうしゅう)氏が当時のご当主鹿之助氏へ宛てて出した書簡類が挙げられます。この書簡の中では、土屋氏から漢文の指導を仰ぐ鹿之助氏の様子が見て取られ、師弟関係を結んでいたことがわかります。

土屋弘(鳳洲)氏は、幕末期に岸和田藩藩校「講習館」で教鞭をとった相馬九方(そうまきゅうほう)に師事し、九方の娘と結婚しました。その後、明治維新を経て、教育者として奈良師範学校長、華族女学校教授などを歴任するなか、漢学者として漢詩文を作り続けました。

当時、日本国内で屈指の漢学者土屋氏から指導を受けていたことは、鹿之助氏が泉州地域の文化人として高い教養を持っていたことを示しています。また、19歳より小学校の教壇に立ち、熊取南尋常小学校長や貝塚尋常高等小学校長を歴任し、漢学者としても多くの人材を育成しました。師と同じく教育者として、また漢学者としても活躍された生涯がしのばれる史料です。



土屋氏からの書簡



土屋弘氏肖像



山中鹿之助氏肖像

編集後記

これまで俳句は、あまり身近に感じていませんでしたが、今回の特別展で貝塚出身の俳人 原 コウ子氏を知ることができ、いろいろな俳句を見て改めて親しみを持つことができました。原 コウ子氏単独の展示会は全国でもはじめてです。この機会に「原 コウ子展」ぜひご覧ください。(M.M.)

かいづか文化財だよりテンプス19号



平成16年10月15日発行
貝塚市教育委員会
〒597 8585 貝塚市畠中1丁目17-1
Tel (0724) 33-7126 Fax (0724) 33-7107
Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.osaka.jp
印刷 和歌山印刷所
テンプスとはラテン語で「時」を意味します。
年4回発行：各1,000部
印刷単価：67^円